

1 4版

昭和8年6月20日第三種郵便物認可

平成25年(2013) 日刊25373号

8|3 [土]

産業経済新聞(サンケイ) THE SANKEI SHIMBUN 発行所 ©産業経済新聞大阪本社 2013 千556-8660 大阪市浪速区湊町2-1-57 大阪(06)6633-1221(大代表)

産経新聞

によると、通行量は平日12万人、土日17万人で前年比5〜7%増と好調。「街に活気を与える出店は大歓迎」と担当者。店や人は変わりつつも、心斎橋という街が発する魅力は今も昔も変わらない。(阿部佐知子)

編集余話

変わる心斎橋⑫ 梅田や天王寺・阿倍野の大規模開発で、地盤沈下が心配された心斎橋。しかし、若者に人気のファッション店、雑貨店が相次ぎ開業し、通行客は増加している。心斎橋筋商店街振興組合



至福 こだわり古書店

昨年、かべ新聞にしようと思ってた新聞記事がひょっこり出てきました。新しく出来ては変わり、変わっては出来ての浮田・中崎戦国時代。ホームページを検索すると、ツイッターも更新中で、開いてよかったです。

開いてよかったです。

大型チェーン店やインターネット通販が主流の古書店業界で、個人経営の「小さな古書店」が出店するケースが目立っている。専門のジャンルに特化したたり、喫茶店や雑貨店を兼ねたりと店ごとに「こだわり」があるのが特徴だ。おしゃれな空間で、店主や客同士が本にまつわる会話を楽しむ店も出てきており、「本」を通じた新しいコミュニケーションの場にもなっている。

大阪府北区の中崎町。古に脱サラした店主、鎌田圭一(長屋の一部を改装した古書店「アラビク」)の看板には「アラビク」の文字。木製の引き戸の先には土間に木製の机といすが置かれ、壁一面に約1500冊のミステリーとSFが並ぶ。店主の森内憲さん(40)は勤めていたセネコンを辞

分野特化&喫茶:客と会話

め、6年前に店を開いた。「もともと喫茶店や本、特にミステリーとSFが好きだったので、一緒にやってみよう」と思っていた。森内さんはエプロン姿。店の奥のカウンターに注文に応じてコーヒーマシーンを回してコーヒーをいれる。客は森内さんと好きな作家や本の話をしながら過ごす。大阪府北区、大川沿いの雑居ビルで美術・芸術系の古書を取り扱う「モデルナ」も、アンティークな雰囲気気の店内に写真集や美術書が置かれている。3年前



木造家屋を再利用した「アラビク」には、ミステリーとSFの古書がずらり。中央は森内さん。2日午後、大阪府北区(沢野貴信撮影)

えるのか。鎌田さんは「ネットが普及したから」と説明する。昔ながらの古書店は、バブル期の1980〜90年代を最盛期に店舗数が減少。入れ替わるように、インターネットによる通販が普及しはじめた。古書店だけでなく、大阪府古書籍商業協同組合によると、「ここ数年に加入した組合員は、インターネット販売のみの人が多し」という。鎌田さんもネット販売だけでなく古書を取り扱っている。そのファンが集まる

「天敵」ネットが追い風

より「マニアックな本が買取りに持ち込まれる好循環も期待できる。古書に関する著作のあるライター・岡崎武志さんは、こうした傾向に「古書店という空間が好きで、店を持つたい」という人が増えている」と分析する。「10年ほど前は、「ネットの普及で紙媒体は廃れる」と言われていたが、結局は「モノ」としての価値があり、書店には「空間」としての価値があって、それは失われることはない。今後は、こうした新しいタイプの古書店は増えていくだろう」と話している。



ここアラビクさん、ここタップハウス

つい先日、うちのおかあちゃんが入院しました。「おかあちゃん」と一口に言っても、奥さんのことを「おかあちゃん」と呼ぶ人もいるし、おふくろのことを「おかあちゃん」と呼ぶ人もいます。私の場合は、「おふくろ」なんて呼び方はショウケンさんしか似合わないと思うからか、母親のことをくすりと笑ってもらうために、「おかあちゃん」と呼んでみたりします。そんな母は、ちよつと前に一躍名をはせたあのT洲会病院に入院しました。病名は肺炎。母の入院は毎年冬の恒例行事になりつつあるので、そのたびに、会社のメンバーに迷惑をかけて申し訳ないです。で、言いたいことはいっぱいあるのですが、一つだけ。その徳S会病院の近くに、昔の古い納屋を改造したようなカフェがあったのです。すごく雰囲気がよくって、なんか、そのお店に、このアラビクさんが似ているような気が…。母はすぐに「元氣なお店の前を通ることはありませんが、このアラビクさん、気になるなあ。

産経新聞大阪本社版 2013年6月3日(土)夕刊 4版1面より